

月の賀歌が言祝ぐ栄え
— 『今鏡』 彰子伝と 『大鏡』 穩子記事 —

小笠原愛子

The Prosperity Celebrated by the Poems with the Words “the Moon”
— A Comparative Study of the Emperors’ mother of
“Imakagami” and “Okagami” —

Aiko OGASAWARA

Abstract

This article points out that description of the birth of the first empress dowager which was told in the biographies of the Emperors in *Okagami* and *Imakagami* are similar. In *Okagami*, Empress Dowager Onshi is considered to have given the Regent the opportunity to seize power. In *Imakagami*, Jotomonin Shoshi is considered to have helped the Regent complete the prosperity. Those two empresses first appear in the episode of the birth of the prince who is expected to become an emperor. In addition, the birth of each prince is predicted by a poem with the words “the moon.” It is rare that a poem celebrating the birth of a baby includes “the moon,” so this coincidence is thought to be due to the fact that *Imakagami* was based on *Okagami*.

Keywords: Imakagami 今鏡, Okagami 大鏡, biographies of the Emperors 帝紀,
Jotomonin Shoshi 上東門院彰子, Empress Dowager Onshi 太后穩子,
poem with the words “the moon.” 月の賀歌

1. 『今鏡』 帝紀における最初の母后伝

本稿では、『今鏡』における最初の母后である上東門院彰子の伝を取り上げる。『今鏡』の各帝紀は、末尾で必ず母后に言及しており、全体に母后を重視する傾向がうかがえる。彰子も所生の後一条・後朱雀両天皇の帝紀の後にその伝を語られているが、注目すべきことは、彼女の伝が「望月」章として独立していることである。『今鏡』において、所生天皇帝紀の末尾に伝を付されるのではなく、独立

した1章を立てられている母后は、上東門院彰子のみである。彼女が『今鏡』において特に重視される母后であることは、この章立てからも知れる⁽¹⁾。

次に「望月」章の冒頭を引く⁽²⁾。

《『今鏡』すべらぎの上 望月 冒頭》

世継も、帝の御ついでに国母の御こと申し侍れば、この帝の御母后の御こと、このついでに申し侍るべし。

御齡廿一二におはしましし時、後一条、

後朱雀院うち続き生み奉らせ給へり。土御門殿にて、後一条院生み奉らせ給へりし七夜の大御遊びに、御簾のうちより出だされ侍りける杯に添へられ侍りし歌は、昔の御局の詠み給へりし、

めづらしき光さし添ふさかづきは
もち⁽³⁾ながらこそ千世はめぐらめ

とぞおほえ侍る。

その女院は十三より后におはしましき。

(上 74)

「望月」章の冒頭で語られているのは、彰子が後一条天皇となる皇子を出産した際の産養のことである。当該章で語られるのは、章末の東北院念仏と女院号定めの故事を除き、ほとんどが彰子の長子である後一条天皇に関わる逸話で、次子である後朱雀天皇との関係を語る具体的逸話は見られない⁽⁴⁾。2代の国母である彰子の重要性は、まずは長子後一条天皇の母であることによるとみなされているようである。

「望月」章の最初のエピソードは、彰子が後一条天皇を出産した際のことで、そこには「昔の御局」つまり紫式部の詠歌が掲げられている。本文に「七夜の大御遊び」とあるのは、誕生後の七夜の産養の賀宴のことであると考えるとよいであろう。

産養は、出産後、3日目、5日目、7日目、9日目に行われる祝いの儀式である。寛弘5年9月11日に誕生した後一条天皇の産養は、以下の日程で行われている⁽⁵⁾。

- 三夜9月13日〔后宫御産養〕
- 五夜9月15日〔今日産養左符(道長)所営〕
- 七夜9月17日〔今夜公家所令設〕
- 九夜9月19日〔(東宮)大夫奉仕御産養〕

『今鏡』の本文によれば、紫式部の詠歌は9月17日の産養の宴で詠まれたものということになる。

「大御遊び」とは、天皇或いは神事に関わ

る遊びを指しているのが一般的である。『今鏡』における他の「大御遊び」の用例を確認すると、以下のように、5例中4例が天皇或いは上皇主催のものを指す用例であった。残る1例は詳細不明の「大御遊び」であるが、これも天皇或いは上皇主催のものと考えて矛盾はない。以下に当該箇所を引く。

○《崇徳天皇主催のもの》

帝の御心ばへ、絶えたることを継ぎ、ふるきあとをおこさむと思しめせり。幼くおはしましけるより、歌を好ませ給ひて、朝夕に侍ふ人々、隠し題詠ませ、紙燭の歌、金椀打ちて響きのうちに詠めなど仰せられて、常は和歌の会ぞさせ給ひける。さのみうちうちにやはとて、花の宴せさせ給ひけるに、「松はるかなるよはひをちぎる」といふ題にて、上達部東帯にて、殿より始めて参り給ひけり。まづ大御遊びありて、関白殿琴弾き給ふ。花園の大臣、その時右の大臣とて琵琶弾き給ふ。中院の大納言笙の笛、衛門の佐季兼、にはかに殿上許さりて⁽⁶⁾、筆築つかうまつり侍りけり。拍子は…
〔すべらぎ〕中巻「春の調べ」章

上 244)

○《鳥羽院主催の七夜産養》

御産養、七夜など、関白よりはじめて参り給ひて、大御遊びどもあり⁽⁷⁾。御湯殿南面にしつらひて、弦打ち、五位六位、白襲に立ち並めり。男宮におはしませば、書読み、式部大輔、左中弁などいふ博士、大外記などいふ者、明経博士とて、椽の衣、朱の衣、袖を列ねて、うちかはりつつ日毎に読むけしき、言はむ方なくめでたし。皇子の御祈り始めさせ給ふ。

〔すべらぎ〕下巻「男山」章 上 276)

○《後白河天皇主催の内宴》

廿日、内宴行はせ給ふ。百年あまり絶えたる事を行はせ給ふ、世にめでたし。

題は、「春は成る聖化のうち」とかぞ聞こえ侍りし。関白殿など、上達部七人、詩作りて参り給ひける。青色の衣、春の大御遊びにあひて、珍らかなる色なるべし。舞姫十人、綾綺殿にて袖ふる気色、漢女を見る心地なりけり。今年にはかにて、まことの女かなはねば、童をぞ、仁和寺の法親王奉り給ひける。詩をば仁寿殿にてぞ講ぜられける。尺八といひて、吹き絶えたる笛始めてこの度吹き出したると、承りしこそ、いと珍らしき事なれ。
(「すべらぎ」下巻「内宴」章 上 317)

●《詳細不明》

御後見にて、但馬の守能通といふが、はかばかしきものにて、後見奉りければ、御家の内もいと心にくき事多かり。いつの事に侍りけるとかや、大御遊びに冬の東帯に半臂を着させ給へりけるを、肩脱がせ給へりける時、宇治殿よりはじめて、下襲のみ白く見えけるに、この大臣一人、半臂を着給へりければ、御日記に侍るなるは、「予一人半臂の衣を着たり。衆人恥ぢたる色あり」とぞ侍るなる。かやうなる事どもぞ多く侍りける。
(「ふちなみ」上巻「白河わたり」章 上 416)

○《崇徳天皇・中宮聖子主催のもの》

この女院、讃岐の帝、位におはしまし、父の大臣も時の関白におはしまししかば、宮の御方大御遊び常にせさせ給ひ、折々につけつつ、昔思し召し出づることもいかに多く侍らむ。四月の頃、帝、宮の御方に、小弓の大御遊びに殿上人方分ちて、賭物など出だされ侍りけるに、扇紙を冊子の形に作りて、歌書きつけられたりける。その歌は、

これを見て思ひも出でよ浜千鳥
あとなきあとを尋ねけりとはと侍りける。
(「ふちなみ」中巻「浜千鳥」章 上 526)

以上の用例から、『今鏡』における「大御遊び」とは天皇或いは上皇主催のものを指すと理解してよいであろう。先に確認したように、史実の上でも9月17日の七夜産養は「公家」つまり天皇・朝廷によるもので、『今鏡』が「七日の大御遊び」としていることとは矛盾がないように見える。

ただし、この「めづらしき……」の歌は、「さかづき」と「月」をかけ、宴席で「杯」が「持ちながら」めぐるように、「月」が「望ちながら」めぐり続けること、つまり満ち足りた栄えが「千代も」続くことを言祝ぐ歌である。「望月」が詠み込まれた内容から、9月15日であった「五夜」の歌とされる方がふさわしいようにも見える⁽⁸⁾。

この歌には他出があり、『後拾遺和歌集』は『今鏡』と同じく七夜の歌としているものの、『紫式部集』『紫式部日記』『栄花物語』では五夜の歌とされている⁽⁹⁾。『紫式部日記』⁽¹⁰⁾の15日条冒頭は、「五日の夜は、殿の御産養。十五日の月くもりなくおもしろきに……」(142)と語りはじめられ、『栄花物語』⁽¹¹⁾の9月15日の記事の冒頭も「五夜は殿の御産養せさせたまふ」(406)と同日の産養の主催者が道長であることを明言している。両書は、その道長主催の賀宴のために紫式部が用意していた歌として当該歌を掲げているのである。

『今鏡』と同じく、当該歌を七夜の歌としている『後拾遺和歌集』⁽¹²⁾の詞書は、「後一条院うまれさせ給ひて、七夜に人々まゐりあひて、さか月いだせと侍りければ」(140)というもので、ここには「大御遊び」や「おほやけの産養」「うちの産養」などの語句は見られない⁽¹³⁾。『今鏡』が、当該歌を17日の賀宴の歌とし、その17日の賀宴が天皇主催の「大御遊び」であったと明言していることには注意しておきたい。

なお、三代集の賀(慶賀)巻には「月」を詠み込んだ歌は見られない。『後拾遺和歌集』

に至って1首の入集が見られるが、採られているのは本項で取り上げた紫式部の歌である。賀歌に、天体としての「月」を歌材として詠み込むのは、当時としては珍しい詠みぶりであった可能性も指摘しておきたい。

2. 『大鏡』帝紀における穩子出産記事

『今鏡』における最初の母后である彰子の伝が、皇子（後の天皇）出産から語りはじめられていること、その皇子出産を祝う歌として、「月」を歌材とする歌が掲げられていること、更にその歌の詠歌事情が皇子の父帝に関わりを持たせられていることは、『大鏡』帝紀における「大后」穩子の記事を思い出させる。

穩子は、彰子と同じく2代の母后である。彼女は『大鏡』に独立した1章の伝を立てられているわけではない。しかし、彼女はまず妻后として夫帝醍醐天皇の帝紀に、次いで母后として所生村上天皇の帝紀に、2度にわたって取り上げられている。醍醐帝紀と村上帝紀は、いずれも後半が穩子に纏わるエピソードで、穩子所生の皇嗣に関する話題であることも共通している。『大鏡』帝紀において、穩子は母后として重要な地位を占めているといえるであろう⁽¹⁴⁾。

『今鏡』は、「望月」章冒頭で、「世継も、帝の御ついでに国母の御こと申し侍れば」つまり、『大鏡』が帝と一緒に母后について語っていたことに倣って、帝の伝の後に母后伝を語ると述べていたのだが、その『大鏡』帝紀における母后への言及は、分量だけを見れば決して多くはない。『大鏡』において所生天皇の帝紀の後に母后として伝を語られているのは、14帝12帝母（「大后」穩子と「中后」安子は2代の帝母である）のうち半数の6人のみである。『大鏡』の帝紀は、そもそも母后に言及することが少ないのであり、穩子の重要性は、帝紀で2度にわたって取り上げられている点からも明らかである。

『大鏡』帝紀の基本的構成は、父帝の名、母后の名、外祖父の名、生誕・立太子・即位の年月日と年齢、在位年数を列挙するというものである。それらの経歴を述べた後に、『大鏡』が必要を認めたエピソードが語られる場合もあり、醍醐帝紀では、基本的な帝紀の後に、妻后である穩子が皇嗣となるべき皇子を出産した折のことが語られている。これは醍醐天皇の御製を取り上げた歌語りであり、穩子の伝ではないが、彼女についての最初の記事であり、皇嗣出産の賀歌が話題の中心である点で、『今鏡』帝紀の「望月」章冒頭と重ね合わせることができる。次に『大鏡』醍醐帝紀の後半、后穩子が皇子を出産した折の、醍醐天皇と伊衡の贈答を掲げる部分を引く⁽¹⁵⁾。

《『大鏡』醍醐帝紀 後半》

この御時ぞかし、村上か朱雀院かの生まれおはしましたる御五十日の餅、殿上に出ださせたまへるに、伊衡の中将の和歌つかうまつりたまへるは」とて、覚ゆめる。

「ひととせに今宵かぞふるいまよりは
ももとせまでの月影を見む

とよむぞかし。御返し、帝のしおはしましけむかたじけなさよ。

祝ひつる言盡ならばももとせの
後もつきせぬ月をこそ見め

御集など見たまふるに、いとなまめかしう、かくやうの方さへおはしましける。……」 (36～37)

穩子が皇嗣となる皇子を出産した折の、「五十日の餅」に纏わる歌として、「ももとせまでの月影」「ももとせの後もつきせぬ月」を詠じた歌が掲げられている。生まれた皇子の長久の栄えを「月」に重ねて言祝ぐ歌である。

この「ももとせ」の歌は、『延喜御集』『玉葉和歌集』にも見えるが、特に『玉葉和歌集』とは、歌句・詠歌事情ともに差異が大きい。解釈の参考のため、以下に引く⁽¹⁶⁾。

《『玉葉和歌集』賀歌 ももとせの歌》

天暦の帝生まれさせ給て、御百日の
夜、よみ侍りける

参議伊衡朝臣

日を年に今宵ぞ替ふる

今よりや百年までの月影も見ん

御かへし

延喜御製

祝ひつる言霊ならば

百歳の後もつきせぬ月をこそ見め

(和歌文学大系 39『玉葉和歌集』上 18)

『玉葉和歌集』の方が、詞書の詠歌事情・歌句ともに理解がしやすく、「百日」を「百歳」に「替える」という機智も明確であるように見える。

『大鏡』の本文にある「五十日の餅」は外祖父によって赤子の口に含ませられるものであり、ここでそれに言及することは背後に穩子の父基経の存在を感じさせる。加えて、「餅」との掛詞的な連想で、この月が「望月」であることをも表しているかもしれない。この歌が、皇子の栄えを「望月」に喩え、その長久を言祝いでいるのだと考えれば、『今鏡』「望月」章の「めづらしき……」の歌とは趣向・イメージにおいてもよく似ているということになるであろう。

この賀歌とそれにまつわるエピソードが醍醐帝紀に置かれているからには、ここで言祝がれているのは、皇子だけではなく、皇子の誕生によって続く醍醐天皇の皇統の長久でもあろう。穩子に皇嗣が得られたことは、醍醐天皇の皇統の存続にとって極めて重要な意義があったと考えられる。穩子は、所生村上天皇の帝紀でも再び語られているが、そこでも

話題は彼女の皇嗣出産である。村上帝紀では、穩子が所生「先坊」の死後に、39歳と42歳という高齢で朱雀天皇と村上天皇を出産したことが語られている。

『大鏡』帝紀は文徳天皇の代から語り始められており、これは文徳天皇以降、藤原氏北家の系統を外戚に持つ天皇が続いたが故であると考えられる。しかし皇統という面から見れば、文徳一清和一陽成の三代は断絶した系統であって、皇統を後代に繋ぐことはできなかった。『大鏡』における「現在まで続く皇統」は、陽成天皇廃位の後に藤原基経によって擁立された光孝天皇に始まる皇統である。ただしこの皇統も、初期、少なくとも醍醐天皇に至るまでは存続が危ぶまれる皇統であったと考えられる。55歳という高齢で思いがけなく皇位についた光孝天皇は当然ながら正式な立太子を経ていない。次代の宇多天皇も、一度は賜姓し臣籍に降ろされた後、父帝光孝天皇崩御の直前に皇族に復して東宮とされ、その立太子と同日に即位している。宇多天皇は生前に醍醐天皇に譲位したが、これは自らの血を引く皇嗣への継承を確実にするためであったことが指摘されている⁽¹⁷⁾。

醍醐天皇の皇統は、基経の娘である穩子に皇嗣を得たことによって存続したが、それも穩子との間の最初の東宮であった「先坊」、及びその子である孫皇子の死によって一時は危ぶまれたのである。穩子の皇嗣出産が重要視されているのはそのような事情によるであろう。

『大鏡』における最初の3帝である文徳天皇・清和天皇・陽成天皇の帝紀は、いずれも末尾で母后について具体的な逸話を語っており⁽¹⁸⁾、穩子は『大鏡』帝紀に語られた最初の母后ではない。しかし穩子は、『大鏡』における現代、つまり後一条帝代まで続く皇統の、最初に位置付けられる母后である⁽¹⁹⁾。『大鏡』帝紀における穩子の地位は、『今鏡』帝紀における彰子の地位とよく似ているといえ

る。『大鏡』及び『今鏡』の主題でもある道長と撰関家の栄華を語る上でも、また皇統を語る上でも、両者はよく似た意味での重要性を有しているのである。

3. 母后伝における哀傷歌

穩子は、所生村上天皇帝紀において、より多くを語られている。村上帝紀は、後半3分の2が、母后穩子の記事である。次に村上帝紀における穩子記事を引く。

《『大鏡』村上帝紀 後半》

御母后、延喜三年癸亥、前坊をうみたまつらせたまふ。御年十九。同二十年庚辰女御の宣旨下りたまふ。御年三十六。同二十三年癸未、朱雀院生まれさせたまふ。閏四月二十五日、后宣旨かぶらせたまふ。御年三十九。やがて、帝うみたまつりたまふ同月に、后にもたせたまひけるにや。四十二にて、村上是生まれさせたまへり。

后にたちたまふ日は、先坊の御ことを、宮のうちにゆゆしがりに申し出づる人もなかりけるに、かの御乳母子に大輔の君と言ひける女房の、かくよみて出だしける、

わびぬれば今はとものを思へども
心に似ぬは涙なりけり

また、御法事はてて、人々まかり出づる日も、かくこそはよまれたりけれ。

今はとてみ山を出づる郭公
いづれの里に鳴かむとすらむ

五月のことにはべりけり。げにいかにとおほゆるふしおし、末の世まで伝ふるばかりのこと言ひおく人、優にはべりかしな。

前の東宮におくれたてまつりて、かぎ

りなく嘆かせたまふ同年、朱雀院生まれたまひ、我、后にたせたまひけむこそ、さまざま、御嘆き御よろこび、かきませたる心地つかうまつれ。世の、大后とこれを申す。 (39～41)

初めの部分では穩子の出産・立後の年齢などの経歴が列挙されており、これは帝紀末尾に付された母后伝の定型である。それに続く部分で語られているのは、穩子所生の「先坊」が没した後に、39歳という高齢で再び皇子を産んで立后され、42歳で更にいま一人の皇子を得たという強運である。そして、所生東宮の早世という憂き目に遭いながら、からくも皇統を繋ぎ得た彼女が「大后」と呼ばれたことに触れてエピソードが閉じられている。彼女の皇嗣出産が重要であることは先に確認したとおりである。しかし、ここで特に多くの紙幅を割かれているのは、村上天皇でも朱雀天皇でもなく、夭折した「先坊」のことである。ここには先坊の乳母子大輔の君の詠歌が掲げられ、哀惜があわれ深く印象付けられている。「わびぬれば……」の歌は、再びの東宮誕生によって母后穩子が立后された「今は」もう嘆きまいと思っても悲しみが尽きないことを述べ、「今はとて……」の歌は、法事後、人々の意識から故人が薄れていく中で、自分だけが喪失の思いに囚われ続けていることへの戸惑いを述べる歌である。

『大鏡』帝紀における穩子の記事は、1つ目が醍醐帝紀の皇嗣出産、2つ目が村上帝紀の故先坊愛惜を語るものであるが、『今鏡』帝紀「望月」章も、冒頭で彰子の後一条天皇出産を語った後には、故人哀悼のエピソードを、詠歌を掲げて語っているのである。次に、先に引用した「望月」章冒頭に続く部分を引く。
《『今鏡』「望月」章の一条天皇哀惜》

一条院崩れさせ給ひて、後一条院幼くおはしましけるに、なでしこの花をとらせ給ひければ、御母后、

見るままに露ぞこぼるる
おくれにし心も知らでなでしこの花

五節の頃、昔を思ひ出でて、殿上人参りけるに、伊勢大輔、

はやくみし山井の水のうす氷
うちとけざまは変はらざりけり

とぞ詠みて出だし侍りける。(上74)

ここで語られているのは、夫帝一条天皇崩御を理解できない幼児後一条天皇の頑是なさを哀しんだ彰子の詠歌と、一条天皇生前を偲ぶ伊勢大輔の詠歌である。ここで話題とされているのは先坊ではなく先帝の崩御であるが、故人と前時代を思う哀傷の歌が置かれているのは、穩子記事と共通している。

この後に、皇太后宮から太皇太后宮に上り、出家して女院となったことが年月日を付して列挙されている。それに続けて、所生後一条天皇崩御によって、2度目の出家をしたことが語られるのが次に引く部分である。

《『今鏡』「望月」章の後一条天皇哀惜》

長暦三年五月七日、御髪剃させ給ふ。
顯基の入道中納言、

世を捨てて宿を出でにし身なれども
なほ恋しきは昔なりけり

と詠みて、この女院に奉り給へる御返し、

つかのまも恋しきことの慰さまば
ふたたび世をば背かざらまし

と詠ませ給へる。初めは御髪そらせ給ひて、後にみな剃させ給ふ心なるべし。

中納言、後一条院のおほえの人におはしけるに、御忌みにおはして、御殿油も奉らず侍りければ、いかにと尋ね給ひけるに、女官ども内に参りて、かきともし

する人もなしなど聞き給ふに、いとかなしくて、崩れさせ給ひて六日といふに、頭剃して山深く籠り給へりけり。齡三十七になむおはしける。聞く人涙を流さずといふことなくなむ侍りける。花山の僧正の、深草の帝の御忌みに御髪剃し給ひけむにもおくれぬ御心なるべし。

なほ尽きせずおほしけるにこそとかなしく、御返しもいとあはれに、御母后さこそはおほしめしめとおほえて。

(上77～80)

後一条帝崩御の後に忌みに参ったものの、「女官ども」が新帝のもとへ参上して「かきともしする人もな」いことを深く嘆いて出家した顯基中納言が、彰子に贈った歌が掲げられている。人々が新たな時代に向かう中で故人を忘れ得ず、母后に故人を偲ぶ歌を贈る顯基は、『大鏡』穩子記事における大輔の君に重ね合わせられる。『今鏡』彰子伝と『大鏡』穩子記事は、エピソードの選択や配列の点で相似形を為していると見えるのである。

4. 『今鏡』における天皇と外戚の系譜

『今鏡』は、帝紀に彰子の伝を立てるにあたって、『大鏡』帝紀の穩子記事を意識していたと考えられる。それは、前項に述べた、皇統における位置づけの重なりに加え、外戚の系譜の面から見て基経の娘である穩子が重要だったからでもあるだろう。『今鏡』が母后つまり外戚を重視していることは既に述べた⁽²⁰⁾が、『今鏡』がその系譜をどのように認識していたかを確認したい。

次に引く部分は、『今鏡』が、道長を「水上」とみなしており、それ故『大鏡』と重複することを承知の上で道長について語る理由を述べる部分である。「流れ」を明確にするために、まずは「水上」である道長について語るという。《ふちなみ上藤波 御堂嫡流伝記 冒頭》

世継は、入道太政大臣の御栄えを申さむとて、その御事をこまかに申したれば、

その後より申すべけれど、水上あらはれぬは、流れのおほづかなければ、まづ入道大臣の御有様をおろおろ申し侍るべきなり。(上 370)

道長を「水上」とする「流れ」を更に遡って確認するのが、次に引く部分である。撰関家嫡流を語り終え、閑院流の伝に移るにあたって、閑院流について語るのは外戚たるゆえであると述べている。

《ふちなみ下 竹のよ 閑院流伝記冒頭》

帝、閑白につき奉りては、御母方の君達こそみな世にしかるべき人にてはおはすめれ。九条殿の御子の中に、三郎におはしまししは、閑白絶えずせさせ給ふ。十郎にあまり給へりし閑院の太政大臣の末こそ、閑白をし給はねども、うち続き帝の御祖父にて、さるべき人々おはすめれば、その御有様申さむとて、まづ帝の御母方を申し続け侍なり。朱雀、村上の御祖父は堀河殿 (= 基経)、冷泉院、円融院の御祖父は九条殿 (= 師輔)、花山のは一条殿 (= 伊尹)、一条院、三条院のは東三条殿 (= 兼家)、後一条院、後朱雀、後冷泉院この三代の御祖父は御堂の入道殿 (= 道長)、この十代の帝は昭宣公と申す堀河殿の一つ御末なり。後三条院こそ母方も帝の御孫におはしませど、御母陽明門の院は、御堂の御孫におはしませば、一つ御流れなり。白河の院の御祖父閑院の東宮大夫おなじ流れにおはしますを、誠の御親は、閑院の左兵衛の督公成、このおなじ御流れなれど、東三条殿の御末にはおはせで、その御弟の閑院の大臣の御末なり。(下 85)

ここでは『大鏡』の語る時代からの外戚の系譜を振り返り、『大鏡』との連続性を意識しつつ、道長にいたる「流れ」を確認している。下線部からが、具体的に天皇及び外戚となった大臣の名を挙げる部分で、ここでは朱雀・村上両天皇の外戚であった穩子の父基経が系

譜の最初に置かれ、道長にいたるまで続く外戚の「流れ」はみな基経の「一つ御末」であるとされている。『今鏡』は、基経を外戚の「流れ」の始めに置いているのである。

5. 月の賀歌が言祝ぐ栄え

歴史物語は、いずれもその物語における「現在」に至る流れを振り返って語ることを目的として書かれたものである。『大鏡』は「入道殿下の御栄花」(55)を語ることを目的に、「帝・後の御有様」(同)をも語るものであり、語りの姿勢は「流れを汲み、源を尋ね」(63)るというものであった。『今鏡』も、『大鏡』の「後の事」(上 16)、つまり道長から現在まで続く「流れ」を語るものであることを宣言している。

『今鏡』の最初の母后である彰子が、後一条・後朱雀の2代の国母となってから、撰関の地位は道長の後裔が世襲することになる。『今鏡』の現在に至る、撰関の流れの最初に位置づけられるのが彰子なのである。『今鏡』は、自らの現在に至る撰関の「流れ」の最初に位置づけるべき彰子の伝を語るにあたり、『大鏡』の現在に至る外戚の「流れ」の最初に位置する穩子を意識したのではないだろうか。

『今鏡』帝紀は、現在まで続く帝と撰関の「流れ」の最初に位置づけるべき彰子の伝の冒頭に、穩子記事と同様に皇嗣出産の折のエピソードを置き、そこでは「千代」にめぐる月によって、長久を言祝ぐ賀歌を掲げていた。しかも、その賀歌は、『今鏡』においては「大御遊び」の歌とされ、皇子の父帝である一条天皇に結び付けられている。『今鏡』帝紀がわざわざ『後拾遺和歌集』の詞書にもない文言を付して当該歌を父帝に結びつけていたことは、穩子の皇嗣出産を祝う賀歌が、伊衡と醍醐天皇との贈答を含むものであったことを思い出させる。

皇嗣出産のエピソードを最初に置き、夫帝に結び付けられた月の賀歌によって、皇統と

外戚の流れの長久を言祝ぐという最初の母后記事の相似は、『今鏡』が『大鏡』を踏襲する意識を強く持っていたことの現れの一つと考えたいのである。

《注・引用文献》

- (1) 所生天皇の帝紀の後に、母後の伝が独立した1章として立てられるのは、『漢書』『史記』に呂後の本紀が立てられていることを思わせる章立てである。本稿ではこの章が立てられた意図そのものを論じる用意はないが、彼女が長期にわたって重要な地位にあった事実を反映していることは動かないであろう。
- (2) 本稿における『今鏡』本文の引用は『今鏡全釈』上下（海野泰男氏 昭和57年3月20日、昭和58年7月11日 福武書店）によった。猶、私に下線・注記を付し、或は表記を改めたところがある。
- (3) 前掲注1の底本である畠山本は「もと」とあるが、蓬左本に「もち」とあるのをとる。『後拾遺和歌集』『栄花物語』『紫式部集』『紫式部日記』等の他出も「もちづき」である。
- (4) 語り手あやめは、『大鏡』の語り手「世継も、帝の御ついでに国母の御こと申し」たのに倣って、帝紀の後に帝母である上東門院彰子のことを語るのだという。「この帝」とは直前の「星合」章で語られていた彰子の次子後朱雀天皇を指していると考えるのが自然であるが、実際に「望月」章で具体的な逸話を語られるのは長子後一条天皇のみである。当該章で後朱雀帝に関する具体的な言及がないことは奇妙なことではあるが、その点は稿を改めて考察したい。
- (5) 『小右記』『紫式部日記』『栄花物語』の間では日程に差異はない。〔 〕内の主催者注記は『小右記』当該日条より引用し、私に（ ）を付して注記した。
- (6) 受身の助動詞「る」の活用（下二段活用）に従えば「許され」とあるべきところだが、畠山本『今鏡』本文には「許さる」の連用形を「許さり」とする箇所が多数見られ、当該箇所もその1つであるので、本稿でも改めずにおく。
- (7) 近衛天皇の七夜の産養は、保延5年5月24日であった。『台記』同日条には、「七夜産養院」（『増補史料大成 25 台記別記』（1965年11月30日 臨川書店））とあり、この産養の主催者は鳥羽院であった。
- (8) ただし、寛弘5年9月の満月は実際には16日である。『紫式部日記』では、先述の如く「めづらしき……」の歌は15日の賀宴のために用意したものであると書かれているが、翌16日条の冒頭には「またの日（16日：引用者注）、月いとおもしろし」とあり、16日の月が満月であったことを思わせる。
しかし、『御堂関白記』の16日条には、同日にはほぼ皆既に近い月食があった旨が朱書きで注記されており、それは『日本・朝鮮・中国日食月食宝典』（渡辺敏夫 1979年5月 雄山閣出版）とも一致している。また『小右記』の16日条には記述が見当たらないが、翌17日条には産養についての詳細な記述の後に、「今夜月最朗明」という記述が見られる。月が極めて明るかったというこの記述は、前日が月食であったことを幾許かは意識しているかもしれない。
「めづらしき……」の歌は、「望月」の歌であること、また『紫式部日記』等の記述から、実際には15日の産養の賀宴のための歌と見なすのが自然であろうが、上記の事情から、当該月は、15日の月よりも16日或いは17日の月の方が強く人々の印象に残る月であった可能性を指摘しておきたい。

- (9) 『今鏡』に引かれた和歌及びその詠歌事情が、『後拾遺和歌集』と一致し、『栄花物語』及びその資料となった『紫式部日記』等とは一致しないこと、他の歌についても同様の傾向が認められることは、つとに注1前掲書において海野泰男氏によって指摘されている。
- (10) 『紫式部日記』本文引用は、新編日本古典文学全集26(中野幸一 校注・訳 1994年9月20日 小学館)により、頁数を付した。
- (11) 『栄花物語』本文引用は、新編日本古典文学全集31(山中裕 秋山虔 池田尚隆 福長進 校注・訳 1995年8月10日 小学館)により、頁数を付した。
- (12) 本稿における『後拾遺和歌集』の引用は、新日本古典文学大系8(久保田淳 平田喜信 1994年4月20日 岩波書店)により頁数を付した。なお、私に表記を改めた箇所がある。
- (13) ただし、後一条天皇誕生以降、後の出産の場合には七夜産養は天皇主催であることが多く、ここでも「七夜」は天皇主催の産養であるという共通理解があったとも考えられる。
- (14) 『大鏡』において最も記述量が多いのは「中后」安子であり、全編に占める穩子への言及はむしろ不自然なほどに少ない。しかし、帝紀に語られた母后としてみた場合には、その限りではない。
- (15) 本稿における『大鏡』本文の引用は、新編日本古典文学全集(橋健二 加藤静子 校注・訳 1996年6月20日 小学館)により、頁数を付した。なお、私に表記を改めた箇所がある。
- (16) 引用は、和歌文学大系39『玉葉和歌集』上(中川博夫 平成28年1月20日 明治書院)による。
- (17) 河内祥輔氏『古代政治史における天皇制の論理』〈増訂版〉(2014年10月

吉川弘文館)

- (18) 文徳帝紀には、母后五条后順子と在原業平の関係を示唆するような文言が見え、醜聞とも言える内容である。清和帝紀には母后染殿后明子の護持僧智証大師のことが述べられているが、『今昔物語集』に語られた紺青鬼と染殿後の関係を思わせるという点では、醜聞に通ずるような内容である。陽成帝紀末尾に語られたのは母后二条后高子が婚前から在原業平と関係があったことを述べるもので、明らかな醜聞である。これらは、「皇統断絶の理由として語られたものか」と注されており、『帝紀における母后伝』として積極的に位置づけるのは難しい。少なくとも、これら文徳—清和一陽成という断絶した皇統の母后達の記事は、撰閲家の栄華に直接に後見した「大后」穩子・「中后」安子・「東三条院」詮子らの記事とは異なる意図によって語られていると考えるべきであろう。
- (19) なお、『大鏡』において最も重要視され、記述量の多い母后は「中后」安子である。彼女は、所生円融天皇の帝紀の後半で、彼女の外祖父が「贈三位したまふ」ことと、大斎院選子内親王出産の産褥に没した際の夫帝村上の嘆きを語られている。しかし、彼女のエピソードは、夫帝との夫婦関係や夫帝への影響力を語るものも含め、重要なものは全て父大臣師輔の伝に語られている。安子が帝紀ではなく藤師伝で語られているのは、『大鏡』の認める安子の重要性が、穩子のそれよりもいっそう撰閲家の栄華と結びついていたが故であろう。
- (20) 拙稿「帝紀及び列伝に見る『今鏡』の時代区分意識」(『大阪夕陽丘学園短期大学 紀要』第61号(2018年12月))